



雪山道



嘉永五年刊



大正心文館
山崎庄九郎



海浦春晴

西角山山上院

上杉小史



千穂亭青宇追善集

土左洲崎鶴友社中編

序



凡そあるまじき世の世に... 其長... 洲崎の浦... 佛... 信...

青岸より心を必す秋の影にほほしき海に常
静なる者のみなり山をてく海をくみん
つしき神佛の足風神の姿もよりの海松名
不易小徳ん心もふししく自然七十一
聖をたのらしく今を流る秋風起くより
龍白雲やこころいひむらりくこころを
かゝるものも悔りも病者も好く或日を
獨りしてあけおの氣をたのりく風友

はひては俳諧をも樂むに十月廿五日西風
強きり共向一心不亂六字一歳寒交頼み
おくふ先をて凋むく一息をく一歩
無しといふおそけおの葉あつたかしくり
返りぬまけけもつゆきをいふやむ社中神樂協
の涙とともいひく老ま生前の寫りゆき男
槐宇り若ん小感一亡靈と慰めまつるを
志すゆき中も秋の山ま厚情の

いふふいふのて報恩追慕を一期好まう
あふふいふのて報恩追慕を一期好まう
あふふいふのて報恩追慕を一期好まう
あふふいふのて報恩追慕を一期好まう
あふふいふのて報恩追慕を一期好まう

赤糸五子仲を

相臨仙杜多鳳洲誌



千秋再々人書吟

人語のてあふふ

あふふいふのて報恩追慕を一期好まう

暑き日や

あふふいふのて報恩追慕を一期好まう

八部や物喰真手り
出ふてらる男

鼓ふりも焚き

きりきり葉の如

はるるふててふ水鏡を祀る

追悼

享和元年十月廿五日 壬戌

皇天て神難くはふらう年の年々々々代捨ふ小田の如
あり流る風流の最中をいひ — 真の跡を慕ふ
あ所多岐ふらうまはしめたるの末を思ふはあふ身遊れり
とてはれ 流るるふててふ — いのあまう 控まふのまはれ
吟 — 甲斐あき面影てふ — ねむる

竹道

帰るるふ流る流るや 雪り道
人の情はなごころ野角 — 泣
徳ありあし酒月さかしく 念のありて 月化
槐宇

竈入りりも中りりりりり

旭扇

漁り月形を意に相りりり

鳳洲

晴るるも小もやうは海鶴

海耕

らりりりりりりりりりりり

三松

鶴形成りりりりりりりりり

荷灯

笠儂 森物りりりりりりりり

甫夕

らりりりりりりりりりりり

佳松

一まみ矢りりりりりりりりり

李山

中内 之れれれれれれれれれ

蘆外

帳子の神のりりりりりりりり

吾山

はるるるるるるるるるるる

巨岬

きりりりりりりりりりりりり

芦海

鷹ひて銀りりりりりりりりり

志得

文音ふるるるるるるるるる

灯

そりりりりりりりりりりり

夕

収りりりりりりりりりりり

佳

年まゝ山來一 梁物り 柳 李
 孔明ららるるのうら新しく
 らまゝとくちとくちの鏡匠
 正しく 柳 蛇 止る所をこれ
 春の呼吸の尾をかき一
 ぬきくく水村の家を柳物
 へき一 白も 暮るる 冬 菊
 八十 杖 杖 杖 杖 杖 杖 杖

五

友もまゝのうら新しく の橋 外
 月と雪のうら新しく 吾
 今まゝのうら新しく 岬
 二 如くまゝのうら新しく 海
 昨日のうら新しく 得
 流るる水も 三
 盆ふまゝのうら新しく 耕
 未永く 鳳

六

拜 ともかくひくく 敬も

六 秋の山行

経てりて 賢者の 秋遊あり されも 行跡 少く なるも
おのづかしく 勅め せしむる 青年 老人 八日 秋 秋遊
二字の 留り せしむる されも 別 秋 行 跡 あり
孫 権 へ 伝 へ たる こと

念 伴 の めくも や 毎 日 花 月 化

雷吟山主

存生 あり 時 々 秋 遊 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋
ま ごと 秋 秋 遊 を 慕 へ

月 雲 あり 一 人 存 生 あり 一 人 行 跡 あり

秋 樹 堂

荷 汀

秋 遊 の 一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋
年 々 秋 遊 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋
由 来 あり 一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋
一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋

さ ぶ ぎ あり 一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋

栂 柳 名 も 根 も 朽 ち せ たり あり 旭 扇

招 く も か 魚 一 匹 秋 遊 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋

月 雲 あり 一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋

亡 び たり あり 一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋

と り 一 人 行 跡 あり されも 一 記 せし 今 日 迄 秋

若 水

南 夕

三 松

若 水

旭 扇

吾 山

友出ると其名堂つるや 李山

入るよ日入つれおさや 佳松

かふしきり 所々満るれぬお毎う籠 巨岬

ふきく 眼り 安のそちの 中か 海耕

減るー 友思ふぬ 日たりー 鳳洲

いそぎく 意也て 蒙りー 叔父千秋ののこ

思ひよけ ぬ家 けりい 園お 小燈て 夫うぬー

まゝ 消る 舟の ひとさうりー 志得

甥

意いそぎく 秋のすうり 心持 ぬあまを 出る 付を

舟よりー 文を 燈ふより たりー といふ 今この 際とら

形作 草ふかきー ぼ 雨しうい 合 湯のー い じ ぬ ち

彼國 小舟の むらけー を 會 若 定 難と ぬ ぬ ち

甘り づれの ちを けー さ たら ぬ ぬ ち

恩を 山雲 小かく れて 付 ぬ けり 男 槐 宇

千秋の 青半 狩先 秋の 字より けり ぬ ぬ ち
あまの けり ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち
心ち けり ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち
けり ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち
招 白 ち ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち
の 可 ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち ぬ ぬ ち

約して語りたる詩を六受と好友の歌と云ふ
者更にお語りするも好く稱して去むし
思ふはも向う一由ありぬ

此夕語りはまゝ一語りまを詠念の事 知已菴 其友

雪とてりり一世はかゝるまゝ一杖然一 為拙

遠一鳥を枯枝より一こふ一樹枝 畫琴

鳥一き名のこ枝より一まゝの枝 柏溪

ゆ一こも雪路小枝より一まゝの枝 山中

名一水小枝一まゝの枝 潤るゝ 可啓

海峽新交社詩多字老古来稱々の體を以て

ゆ一まゝの枝より一まゝの枝

ゆ一まゝの枝より一まゝの枝 府 寒葉

晴一まゝの枝より一まゝの枝 不石

清一まゝの枝より一まゝの枝 齊 畫悠坊

看一まゝの枝より一まゝの枝 光塵

撥一まゝの枝より一まゝの枝 洞龜

まゝの枝より一まゝの枝 如石

赤き縁月一若流りりきき佛
 茶夕
 茶少来く多の流る家定きりふ
 極水
 ころして肯小出さむ山にさか
 雪柳
 消る香えぬ海山の自然うき
 浴衣
 夫去り来るをり終て散りん
 耳洗
 水苔の自然うれさ後り如
 府
 極英
 障接る白き香紙平向うぬ
 加扇
 うりぬおハ多してあうりり
 笑解

秋の宵もかきく雪小松公一
 冷水
 物あつ神り一氷もや冬を月
 若園
 飛去く無一海崎の友激
 赤丘
 誓仙
 雲の流一便うあきりし心
 中村
 此君
 月も冬流とあて雪り佛うね
 踏江
 名来り葉や花うもる霞山出
 五社
 津島
 月雪小舟のいおきや其笑う流
 清里
 雪小波一流も向うさうり如
 榊山
 竹露

大崎也 亡人慕小浦千鳥 入野 思撰

鳴鐘のりく 水も秋のりぬ 升が 素陽

友のり 減りかふしや小秋の屋 之 帯河

水も草深くも 鈍きもいふ 田野 水也

元朝氏志くも 水もゆきいふ 良 猿子

鳥鬼もや 志りも果ぬ神志 良 只隠

初雪も結るや 志ふきん 人、名溪

おのり 志ふきん 初雪のりぬ 酒の緒

青牢老人の再遊も 通持の友と 下 志 之

何となく 志ふきん 初雪のりぬ 酒の緒

志ふきん 初雪のりぬ 酒の緒

志ふきん 初雪のりぬ 酒の緒

亡人の志 月坊の柳 里桂坊

首の志 首の志

幽月の志 幽月の志

志ふきん 初雪のりぬ 酒の緒

中略 中略

折る新 花も彼岸も百う日 槐宇

餘無

巨岬

雨も日もうれき色や春の神

心乃きき雲雀鳴く心 鳳洲

歩閑きよき花を枝よりうり移す 三松

春の心はふさふさ多秋の心はゆる 月化

書うけつゝのまらぬふさふさの月 吾山

山根の手勢は上まらぬ風 荷灯

快ふきよく満一酌ほろけき 荳外

流し目とくくく盃をささく 甫夕

待もきぬお汐月よの増かり 李山

唐手焼くくく曙を居新 若海

小文庫を塚小築一屯くく 旭扇

物托の能き月後乃くくく 佳松

初智と湍くくくくやわらわ 志塔

峰もせぬのり傘一ふ敷 海耕

紫の竹も 漏れは 遠く びくき

竹道

末も 涼しき 岩 老き 水

槐字

六一順

各語 考 考

星月や 蝶の 羽を 干す 蝶 垣

鳳仙

やけ 枝の しまじり や 雛よ の 花

荷訂

石ころ 小舟 小舟 小舟 小舟

海耕

この 中 中 中 中 中

甫夕

散る 又も 又も 又も 又も

菅外

時を かり 葉 留る 出る 出る

三松

たつ 山 時 傘 小舟 竹の 花

吾山

水 きの 日の 遊ぶ 糸 結ぶ 糸

旭扇

猿の の め くの 糸 結ぶ 糸

佳堂

ま ち 友 や ち ち ち ち ち

李山

沙 子 沿 沖 糸 結ぶ 糸

若洲

二 日 炎 道 下 糸 結ぶ 糸

志得

あふき侍をくまへとせりし時
松平

あふき侍をくまへとせりし時
竹遊

あふき侍をくまへとせりし時
月化

文音 四季 雜歌

あふき侍をくまへとせりし時
左徑

あふき侍をくまへとせりし時
歩牛

あふき侍をくまへとせりし時
旭松

あふき侍をくまへとせりし時
松家

あふき侍をくまへとせりし時
普泉

あふき侍をくまへとせりし時
魯竹

あふき侍をくまへとせりし時
竹堂

あふき侍をくまへとせりし時
近白

あふき侍をくまへとせりし時
松二

あふき侍をくまへとせりし時
是月坊

あふき侍をくまへとせりし時
和光

あふき侍をくまへとせりし時
午松

柳味吟 卷之三 中 系物の 削屑 アキ 後諭

新々き 踏心 居きぬ 潮の系 アキ 吐泉

修験と 行らう びく 秋の片 夕 可敬

世少く 一 らむけ 考ひく 歳う 龍 根山

新うら や 此うら 園り 引 故是 梅市

老を 終て 通り 木の 系で 又 ぬき 賞魚

叶くの 系 小か ちや 高土 虎 其朝

五月の 日や 系 ぬし 一人 正 纏と 相 大り 旭山

紅梅や ちきき わり 赤乃 溝 あり 岩 意彰

竹を 高 文を 破り 洪き 一 ノ子 卧雪

空に 借と 神 有り 引 ぬき 鳴 又う 水 宿毛 眠子

其石 中の 言は 花 籠り 秋 瑞や 又 糸 立 和泊

那も 多し の つつ 〇 糸 紗や 世 董 平田 紫山

春日 野う 納 糸 舟 糸も 多し 一 一 蹠蛇山主 翹毛

流し 一 糸も 一 糸も 竹乃 蒼う 龍 中村 貫三

なるき 日や 勢を 泥 せ 池の あり 下田 成

魚の背月 疎竹と氷の音 下田 可習

暁の匂い 庭のうさぎ 秋明茶形 松嘯

葛の葉をよそ 垣越小嶽 梅

梅の野へ 遠望て見る 菴の那 桃舎

よるれいふ 草花の 菊の根と部 里仙

けいさや 母のうきうき 竹の枝 可陽

松風の机 小のうきうき 魯文

うきうき 世を遊ぶ 吟や 有隣 レ

④

神して 権記をんらるさうら 松宇

けいさや 吟や 小のうきうき 波靜

吟よる 牡丹の瘦し 主と部 市浩

出づる 一葉をよそ 三月を月 半山 素風

ふらふら 雪ふ 垣をき 柳山 松翠

時を 梅や 森の意乃月 烟水

名月や 水の音をよ 出も 露光

お宿の 跡ふ 又ふらふ 娘柳

十六

去月てがたのち雁の年、月例
棧や、あてつゝ、山陽
公達、心、沙、干、河、心、山、中、足、行、縁
雪、閑、小、州、く、ふ、語、乃、藁、音、く、水
く、く、中、や、あ、ふ、心、お、て、鳴、く、屋、く、一、指
銅、鞆、の、友、信、く、く、中、や、秋、行、音、素、兄
く、き、神、や、世、も、能、く、水、く、く、く、く、く、米、雪
以、満、く、月、の、く、く、く、柳、く、く、貞、甫

名、月、や、露、小、後、く、家、野、き、く、象、松、和
雪、く、く、く、く、谷、く、く、戸、く、く、水、通、其、松
汲、水、の、初、積、雪、出、く、く、く、く、く、く、く、環、之
き、く、く、く、く、霧、く、く、く、く、く、く、山、田、其、舟
卯、の、屯、く、目、山、く、く、く、く、水、行、乃、水、梅、甫
葉、行、急、く、中、く、く、く、く、く、く、永、沙、人、小、蔭
月、く、日、の、く、く、く、く、く、く、く、く、く、松、く、
擧、め、れ、樹、小、く、く、く、く、嶺、く、く、く、く、三、好

かろまろも持とや命の系 ヲ備 霞舟

飛早や一都ノ鳴や巢乃形、羽白

あゝ〜々々々々々々々々々々々々 戸彼 和風

波竹小雀のもる繚まの那、青莪

うまひとの鳴のねまのつねの那、石道

群鳥やまると終ふとく人 イッマ 四春

水のけい〜く流るゝあ、赤那 城西 三省

○

笑もも人羽白乃雪具乃雪乃 美農大匠 糖翁

唐蘆は鳥乃摺合ふ群や白出院、壽山

羽二重乃上も鏡花衣衣乃 梅居

危く〜乃田や危くり 多良 鳳枝

去三月有毎小す舞柳、うれ 墨保 詠名

〜とわねく〜と〜と〜と〜と〜と 大麻 花賞

やまの〜あ〜下や濁色ぬ〜と〜と 竹圃

雪乃中、積〜と〜あ〜片形〜と〜と 高田 墨川

夕暮るやあふ 淡く鐘の音

北方 杜雪

まど捨る敷もわろ哉 賦林

七来名 里曉

塙妹を囲り 三つくびの巻葉抄

圭甫

各川小野 上々や 香見抄

大井田 瓦松

四つやのせん五岳山小再會の孫と交し音序
静光抄言辨 小治く ありあり 阿ふ月名
五月曉 終白念の性空を逢ふれ くの素
静光と又ふ静光ふきふれをわら〜

伊は塚も 肩を居るや

美濃 曾松茶

青宇程変化 五能法風 和山風之

無常親 五能實之 園之函 字不 後程云不

精字 百友 為男 心無 後序 或 垣 歌

或 弘心 終 宋 全 備 而 後 正 枕 心 為 常

今 之 美 友 在 在 志 志 秋 月 之 極 遠 近 及

ふ 余 信 田 教 友 師 月 之 場 意 志

清 政 龍 美 而 可 身 以 必 教 之 刻

其 字 也 同 不 能 如 吾 他 某 法 學 何

在 之 の 後 之 月 映 志 意 之 際 而

播旬也或有白濁之病其苦
 志之存乎心人美性素在道
 其苦在病而後有於是社友充
 之解其氣以成其神素心為化
 以多一客名曰雪之道名其義
 彼在時而自化之乃以持傳之
 此向志嗚呼不亦悲之存志於
 此而不可
 魯相菴

素永五五
 六月
 月十
 魯相菴



追善集と上末せんと海陸百五十の好里
 此方は融くは予と慕いあるも
 槐字との篤信と成る

行々や 叙小おのひらから
 魯相菴

銭まき
 青
 槐字

白帯
 女

酒
 永字

月
 一曉

修
 朝

六六白表

席上探題

星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一
星之府くともくく	一	一	一	一	一	一	一



 星之府くともくく

